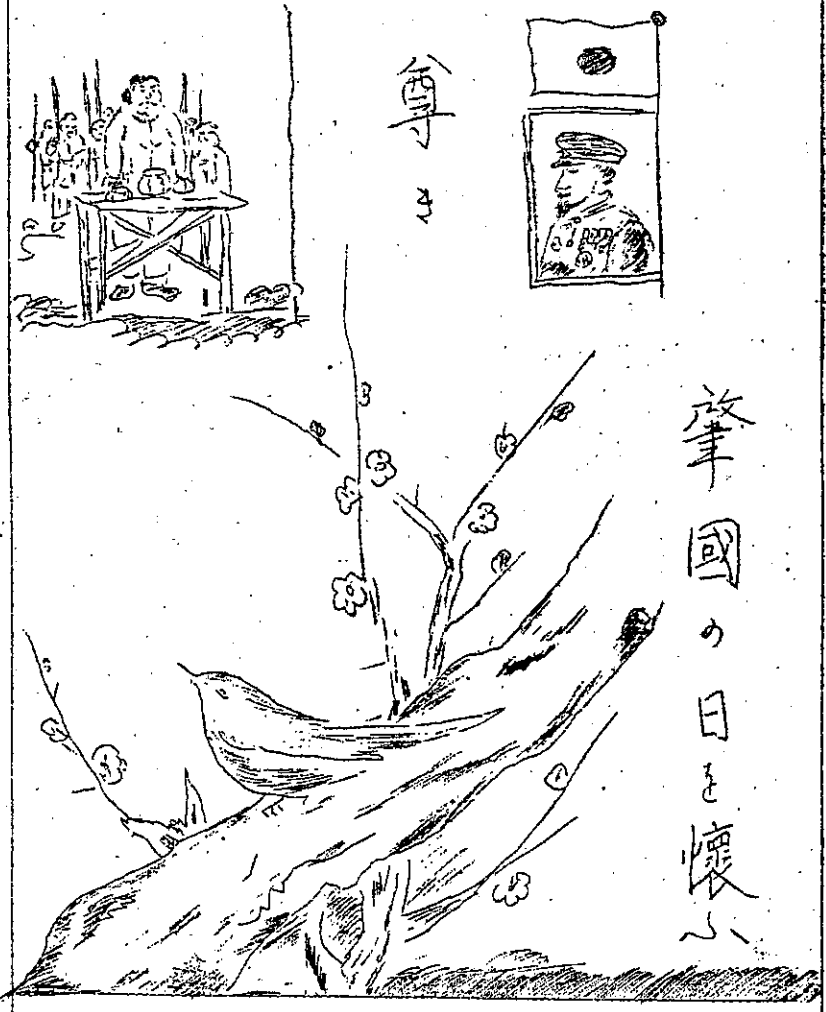


ふしでふ  
第百六十四號



肇國の日を懐く

學校行事 其他

二月六日 午後一時 水難者慰霊祭ニ参列

二月十日 紀元節式 建國祭参列 神社参拜

二月十六日 學藝會

二月十七日 西村喜美子 手甲脚絆其他寄附

二月二十日 在滿兵ノ慰問手紙三五七通ヲ出ス

ジン一ツツリカタ

ヨコヤマヒロユキ  
 ガクゲイタワイニニ ボアラハ モモタ  
 ラウノ ゲキヲ シマシタ  
 ヒロジキヤンガ モモタラウデ ボク  
 ガ イヌデトシラウナマンガ サル  
 デトシラクンガ キジニナリマシ  
 タ。オホセイミテクレテテヲタ  
 タイテクレマシタ。ウチヘカヘテ  
 カラ キンジョノヒトガ  
 ヒロユキヤンハ ジヤウズダツタネ  
 トホメテクダサイマシタ。ボクハ  
 ハツカシクナリマシタ。

ヘイタラシテアソシタ。サウシ  
 イカリモミタ。スユシダツトボ  
 ノガオキヲモツテキタ。ボク  
 モウカヘルカラ  
 トイツカハツタ。カヘテゴハン  
 タベタリシチオフロニハイッテ  
 ヤカラダヲアツタ。サウシテ  
 ネマシタ。

私ハコノアヒダシケンノ時ナ  
 ヲトリマシタ。ソデウレシカッタ。  
 ヲカアキヤンニミセルト  
 ヲクデキタネ。コンドモナチン  
 トルヨウニベンギヤウシナサイ

高内亨

ボクハチクゼンマルニイッテ  
 イクトボウイサンガキタ。イッ  
 カラボウイサントカンパンヘテ  
 テウミヲミタリセンチャウベヤ  
 私ハオジマイマシタ。  
 私ハコンドモナチンヲトルヨウ  
 イッシャウケンメイベンギヤウシヨウ  
 オモヒマシタ。

ミヤサキノリコ  
 タシイ タノシイ 私チノ ガクゲ  
 イタイ ガコノ アヒダ ノニチチ  
 ウロ アリマシタ。 ソシテ 私ハ  
 オドリニ デマシタ。 かんが オホ  
 ゼイ ミテ オタルデ ジヤズニ オ  
 ドレマセンデシタ。  
 コンド ハモット シヤウスニ シテ  
 ウト オモヒマス。  
 コマダ マツコ  
 アルトキ マタクシガ ガツカウカウ  
 カハッテ ママゴト フシヤク トシ  
 タラメシロ ガチサイクセニ  
 オホキナユエ デトモ カハイラジ  
 フナイテ キマシタ。  
 マタクシハ カハイラジ カハイクチ  
 ナラナイノデ ソレヲ スエジミテ  
 キルト オモテデ  
 マツキヤン ハマクオイデ。  
 ト イッタルデ マタクシハ メジロ

オミテ キケノヲ マメテ イッテ  
 マンシウノ ハイタイサン  
 マンシウハ サムイサウデスネ。  
 ボクノ オチサンモ ハイタイデ  
 マスカラ オチサンタチ トイッジョ  
 ワルイ バンクタチ ヲ マツケテ  
 サイ。  
 ボクモ オシヤウケンメイ ペンキヤ  
 シマス。  
 カハサキカズ  
 マンシウノ  
 ハイタイサンへ

尋ニつゞり方

だい 學藝會

西村 喜美子

學げい會に私は、いぬんれいになりま  
 した。 其の時私は自分がほんとうのじゆん  
 れいだつたらと思ふと、なみだがたくさん出  
 て来ました。 けれど、余余泣いてはつかりぬ  
 へは出来ないと、思つてなみだは出るけれど、  
 一生けんめいにやりました。

「知らぬお國の村々を」といふ所ではな  
 みだがたくさん出て、からだがあつくいたま  
 りませんでした。 けれど、一生けんめいに  
 やりましたので、みんな泣いたさうです。  
 家へかへつて来て見ると、お父さんが  
 「きみ子、よく出来たね」とおつしやい  
 ました。 私はうれしくてたまりませんでした。  
 た。 まずえおばさんも、

「きみちゃんのために泣かされたよ」とい  
 つて笑ひました。 私は、はづかしくしたま  
 ませんでした。 それから、私は、喜美子さん  
 秀子さんが助けしてくれた時には、うれし  
 一はいでした。

渡辺 三朝

學げい會は、二月十六日でした。 十五  
 は、そうれんしかで、ぼくたちが見たリヤ  
 リしました。 ぼくも十五日のそうれんしかだ  
 「よく出来た」と先生にほめられたの  
 うれしかつたです。 十六日には、もつと  
 ずたしようと思ひました。 十六日にた  
 した。 ぼくらはおひるからでした。 い  
 くぼくらの番になりました。 ぼくは  
 むねが、大きくしたけれど、一生けんめいに  
 たら、あとで、おちいさんと、ほめられたよ

北村 和代





小さいねこが二匹上になり下になりしてじやれであた。あまりかわらぬ、ゆでじばら。それを見  
てゐた。すると其のうちには僕の見てゐるのに気がついたのでみへて一匹はやめたがもう一匹はや  
めないので一匹にとびついて来た。僕が首をよこにまげてみたら一匹にげて行つた。僕が庭に  
僕がそれには弱虫だ。といつたら一匹が「ヨヤー」つとないた。よろこんだのでせう。僕が庭に  
おりて頭をなでてやると喜んで「ヨヤー」つとないた。めんこそ意の所にもつて来てや一た  
めんこそ落ちてたりで「ヨヤー」つとないてくわへてにげて行つた。

● 本箱

水笛 邦枝

私の本箱には色々なものが入つてある。本箱の中には本ばかりは入つてゐない。お裁縫の箱もはいつてこれ百人一首も入つてゐる。油虫まはいつてある。又本箱の引出しには考査や羽子板や絵やいろ／＼の物が入つてゐる。為に整理をするのがやつついて中々しませんのぞ中はぐちや／＼です。

● 山羊

山内 初枝

雨宮さんに女やぎがいる。その山羊は毎朝早くしや釣場の草をたくさんあるところにつれていつて草を食べさせてゐる。いつか私たちが目かくしおに立て私がおにになつたとき誰か山羊をばなした。私は山羊は大きらいなりです。私が山羊のところへ来た時大きなこゑで「ヤー」つといつで争ぬぐいをとつて向ふを見ろと雨宮さん力子が笑ひながら私の方に来たので今山羊をばなしたのはお前だらう。全くひどいね。といふと向ふでは笑ひながら「うんさうだよ」といひました。それからお前はたぐ／＼山羊におどかさねしました。

尋五の綴方

● 僕等の學藝會 里川金一

去る二月十六日は僕等の學藝會でした。だんだんプログラムがめくられて僕等の番が近づいて来る。僕の出る役は水兵です。また幕のしまつて居る舞台に上つてなうんだ時。うれしさと恥かして胸はどき／＼となりました。いよ／＼幕があくと話す言葉も足もぶる／＼とふるえました。終つて幕がしまつてからも恥かしくてもまりませんでした。

● 劇に出た時 毎田 米

私達のげきは水兵の母でした。私達の番はだんだんにせまつて来ました。私は胸がどきどきしてたまりませんでした。もう私のする番にきました。幕が開くと私はすぐ舞台へ出ました。一ぱいになうんで居るお客さんの頭を見るとき、こわくて／＼聲も出ません。私の顔は火がぼう／＼もえてゐるやうにまつかになりました。終つてから和子さんに顔が火のやう

にもえたとこいつたらあたまもといひました。家にかへつたらお母さんにみんなよくできましたといつてほめられました。

● 豆まき 池田 光

私が二はんをたべてゐると何處から豆まきの聲がわくわくして来ました。私は急いで三はんをたべた。するとお母さんがもう豆をまいてもい、よといひました。私はニコ／＼したがり。くは内」とまくと満ち満ちが夢中になつて拾ひました。すると満ち満ちはあまり夢中になつてねづみのうんこを豆とまちがへて食べてしまひました。私が笑ひながらみつつ、どんな味だつたときくと、「おまかつたといつたので又大笑いたしました。それから豆を少したべてねました。

● 楽しい春は早く来い 野口 晃

ピーピーピーチクピと楽しさうな小鳥の音が聞こえる。早く春になればよい。春は目白／＼ぐいす。ひよ鳥等が鳴く頃だ。鳥の鳴く声はきれいです。ん下心持がよい。まだそれだけではなし。氣候もよくて草木が青々として、すい／＼風が吹かれています。







人間の顔程不思議な物はない。何々思はたり。正んわり眺めてある時、別に不思議とも思はないが、不思議ななあと考へ出すと不思議で不思議で仕方がない。誰の顔を見ても目が二つありてゐる。その上にまゆ毛があつて顔の真中に鼻が一つ高くあつて、その鼻に穴が二つあつてゐる。両側に3の数字のやうな耳が二つあつて、鼻の下に何でもおもしろい物を見ると食へたくさうてしかたがない口が二つあつてゐる。こんな目、耳、口、鼻がよつて人間の顔が出来てゐるものである。この目が三角になつて口を一文字にむすふと、忽ちおこつた顔になる。それが鼻のあたりにしわをよせて口をあけると、忽ち笑つた顔になる。目をほそくしてためりきをしてゐる顔か、悲しい顔になつてしまふ。人間の顔は實に不思議なものだ。

滿洲の兵隊さんへ

滿洲の兵隊さん、さぞお寒い事だせう。御地は大変な雪でせうね。でも小笠原は雪一つ降りません、私達は小笠原に住んで居ても寒い〜といつてふるへて居ますのに、兵隊さんは何十倍も寒い所で悪い賊を退治して下さる力をありがたく思つて居ります。此も皆大日本帝國の爲と思つて働いて下さいませ。私達は戦争に出ないから一生けんめい勉強して國の爲に働くつもりで居りますから、兵隊さんにも一生懸命に戦つて下さいませ。(後略)

二月八日

母 田 美 津

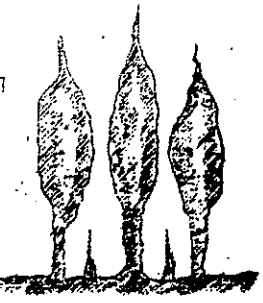
高二海

西村正一 一口に海といつても色々ある。隠やかな春の海、荒れ狂ふ冬の海、等々。麗らかな風のない暖かな春の日、水面は鏡の如く澄みきつて唯岸・白砂・小波がざれかゝる時、此の時の海こそ眞に平和と象徴するものである。腹を空けた時や、心配事のある時等此の海を眺むれば自然に心の安んぶかになる。を覺えざるであらう。實に春の海こそ精神の慰安になくはならぬものである。又春も漸く終り夏も過ぎ更に秋も過ぎ冬に入り、海一度怒れば怒る荒れ狂ふ怒濤は何物をも打砕く勢で陸におしよせ、岩にあたり、玉と砕け、霧を吹く。此の時の海こそ進めよ止まぬ我等日本男兒の意氣をあらはすものではないか。今前者と後者と比較する時、我等は好むであらう平和な春の海もよい、しかしそれにも勝つてゐるのは冬の海ではなからうか。

寺田愛子

風が、バシバシ、吹く。寒く、冬の海に立って見る。波は白く高く、沖に旋とに波にゆられてゐる。舟は海があらわしているの、ついに我も事が出来ずに、さびしうく、朝から帆をかけたカヌーは港外をめぐり出でゆく。日が西に、かたむけかけると、あちらこちらから白帆をかけた舟がわらわらしてゆく。カヌーのついである人々は皆嬉しうに顔を上げてゐる。えものかたくさんと水たけであり、こんな日は、捕鯨船も取つてくる。波々暖くなる。海も穏やかななり、捕鯨船も引上げてゆく。三月の半は暖から、ほつ

新千狩もはじまる。もう四月の始め頃になると學校でし全校の潮千狩をする。あさり  
 をはじめてして、はちまい、よめがさ、こやす貝、じやこ貝等とれる。面白く程とれ  
 る。たまには舟に乗る。いさゝかの島に行つて潮千狩をするこももある。五月は海が  
 六月の終り頃になると水泳がはじまる。私達は六月はまだ泳がない。涼しい風が、それ  
 吹いて海は非常に涼しい。時々小波が岸にはせると、そこでおそんでおた三ツ四ツ  
 の子供が塩水を、かんだと見えて、はあ、いひながら目を、パチクリ、させておる。  
 九月にいつておたお母さんは、死は、はしよつてはいるが、こしまさか、ぬれたと見える。  
 九月七八月になると、カヌーに乗つて沖に泳ぎに行く。又魚をとる。一年中に夏ほど海を  
 面白く暮らす時はない。もう八月の末、九月近くになると又波が高くなる。男の子は波のり  
 に行く。大きな波がやつてくる。すると板を片手にした男の子達が板をもたない方  
 手で波を前から後へかまながら波のり、百米も遠い所から岸までやつてくる。様子は、如何  
 にも面白さうで、見おる人もたたくさんある。かくして秋もすぎ、又波のせじ、冬がくる。  
 こうして春、夏、秋、冬と、それ、変化した海を見るのも面白い。



# 「萌ゆる若草」

寸舌尺言

○ 團體は、凡てが自治と共同によつて、成立し、進歩し、發展するのである。  
 ○ 自治は團體員各自の責任觀念と、義務の履行によつて、共同は讓歩と服従  
 によつて、成立する。

○ 俺がやらなくとも、誰かがやつてくれるだろう。この精神、なげやり、無責任な人まかせな  
 他人根性は團體を破壊する一番恐ろしい。そつて悪むべき敵である。  
 ○ よしんば、椽の下の力持で甘んじてもらい、自己がすべてを背負つて立つ覺悟をもつて、自  
 己の職分を忠實に果すの心がけが各自にあるならば、其團體は必ず發展するものである。  
 ○ 服従は恥辱だと考へ、人も人なり、我も人だと理屈をつけて、不秩序の眞似をしたがる人間は  
 野蠻人の旗頭で、るに足らぬ人間だ。自分の選んだ代表者に、自分の代りに統帥してくれ人に  
 其の人の定めた規律に服従するのは、即ち自分自身に服従するのだといふことの解はぬ人達だ。  
 ○ 之は無責任病、利己主義病、權利主張病、自惚排他病、服従忌嫌病の患者ある團體である。  
 この患者を除かなければ、結局國家は發展しないのである。

◎ 二月二十五日現在 青年學校在籍者數

男女	専修	研究	本一	本二	本三	本四	合計
男子部	1	6	4	5	2	2	17
女子部	8	1	7	0	1	1	18

等級	一等	二等	三等
一年	浅沼昭平	柳沢 澄	島川弘樹
二年	永田稜威男	内山 裕	渡辺三朝
三年	平野昌代	高内利子	横山芽文
四年	堂田彌生	横山秀雄	小林五郎
五年	鷗沢 寛	毎田 米	浅沼栄一
六年	高崎テル子	井上キ子 藤滝 淳子	重田 清
高一	佐々木 勇子 水野朝美 毎田 美津	佐藤平次郎 金原くま	板東角男 村松フギ
高二	小泉 林サキ子	高崎喜久雄 日高 子	吉塚光臣 寺田愛子
青女一年	菊池初枝	浅沼タツ子	奥山紀子
青女二年	畠山文子	菊池つねみ	菊池ヒサ

おはび  
 本年度書初成績は一月号で発表致す筈でしたが編輯長が  
 うっかりしてゐて記載することを失念致しましたので本月号に  
 記載致しました。お許し下さい。

昭和十一年二月号あてしよ 大村學堂高等小學校発行

入塾者 鎮守の古林へ送る手の禮

二月中入學者姓名  
 笹本明 浅沼貞次 名和田喜代春 大城高明  
 上原幸四郎 浅沼弘通 サイマシホーロ 以上七名  
 二月十七日菊池正四郎君満洲歩三三へ入塾の爲出立に付  
 見送す。

昭和十一年二月